

臼杵バイパス発掘調査報告書

徳尾遺跡・道安遺跡

大分県教育委員会

1982・3

例

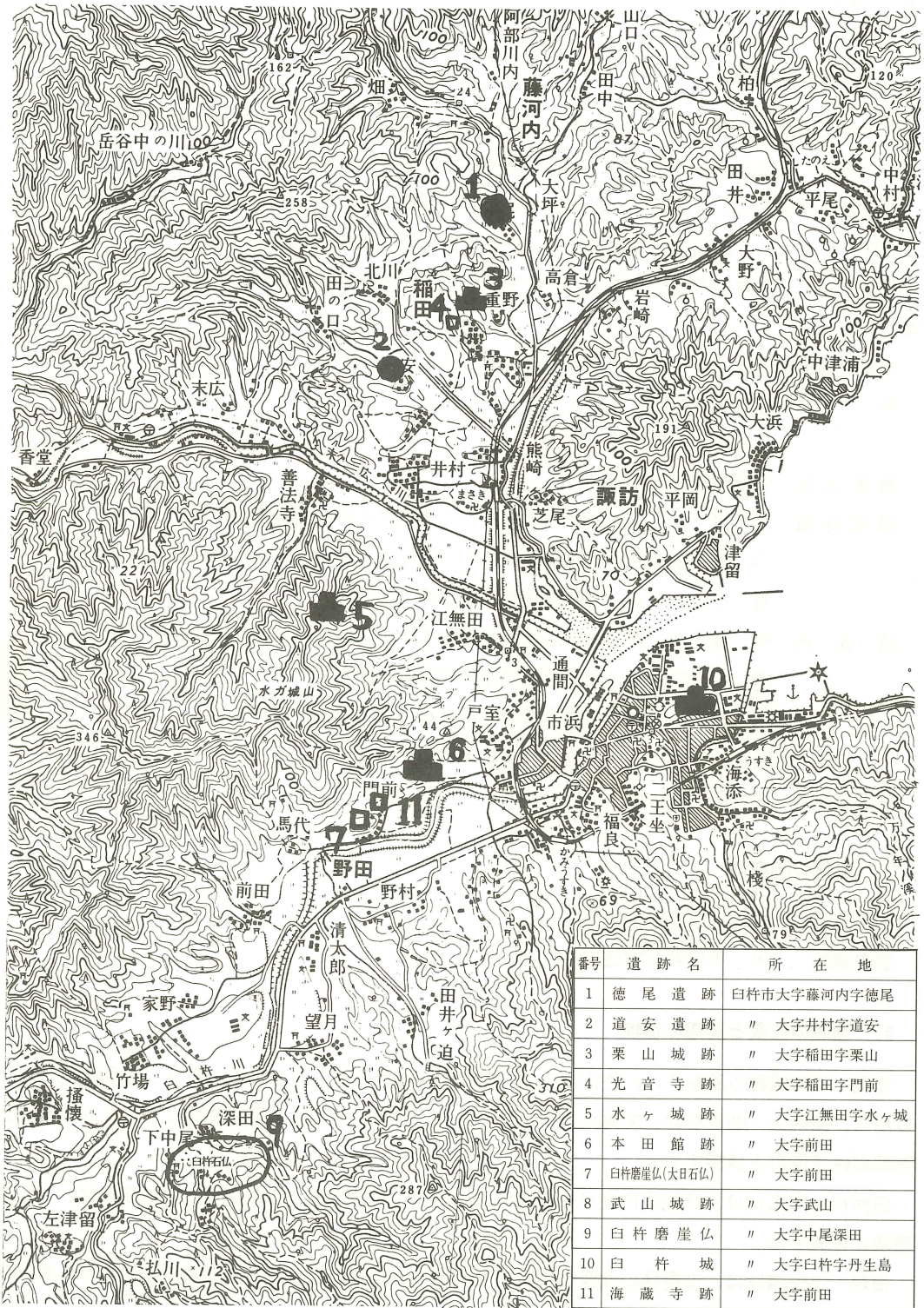
言

1. 本書は、大分県土木建築部が事業主体、大分県教育委員会が調査主体となって実施した国道217号臼杵地区改良工事（臼杵バイパス）に伴う発掘調査報告である。
2. 発掘調査の実施については、臼杵市教育委員会と大分県臼杵土木事務所の全面的な協力をえた。
3. 本書の執筆は調査員で分担し、編集は主として西哲弘があたった。

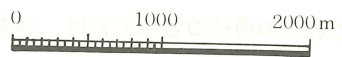
目

次

1. はじめに	2
1) 調査に至る経過	2
2) 遺跡の所在地	2
3) 遺跡の位置と周辺環境	2
2. 徳尾遺跡の調査	3
1) 遺 構	5
a) 第1調査区	5
b) 第2調査区	11
2) 遺 物	12
3) ま と め	13
3. 道安遺跡の調査	14
1) 遺 構	14
a) 第1調査区	14
b) 第2調査区	16
c) 第3調査区	16
2) 遺 物	17
3) ま と め	17



第1図 遺跡の位置と地形図



1. はじめに

1) 調査に至る経過

近年の交通事情の悪化に伴い、各地で道路の改良・拡張・新設等諸施策が国・県等の手で進められているが、大分県でも例外でなく各地で同様の事業が実施されている。

本調査の対象となった徳尾・道安遺跡も県土木建築部の実施した国道217号臼杵地区改良事業（臼杵バイパス）計画に伴い分布調査をした結果、遺跡の存在が確認された。

したがって、遺跡の実態を確認し、記録保存や工法変更等の基礎資料とするために発掘調査を実施した。

なお、調査組織はつぎのとおりである。

期 日 自 昭和56年5月1日

至 昭和56年10月1日

調査主体 大分県教育委員会

調査委員 賀川 光 夫（別府大学教授・大分県文化財保護審議会委員）

小田 富士男（北九州市立歴史博物館主幹・大分県文化財保護審議会委員）

原 尻 實（大分県教育庁管理部文化課長）

調査員 後藤 宗 俊（大分県教育庁管理部文化課文化財専門員兼埋蔵文化財係長）

清水 宗 昭（大分県教育庁管理部文化課主任）

菊田 徹（臼杵市教育委員会社会教育課主事補）

西 哲 弘（大分県教育庁管理部文化課主事）

調査補助員 江藤 恭 丞

2) 遺跡の所在地

徳尾遺跡 臼杵市大字藤河内字徳尾

道安遺跡 “ 大字井村字道安

3) 遺跡の位置と周辺的环境

徳尾・道安遺跡の所在する臼杵市は、大分県の東南部に位置し、豊後水道に面した臼杵湾にのぞみ南は、鎮南山・姫岳を仰いで津久見市に接し、北、西は、縦ノ木山系の連山によって大分市・北海部郡佐賀関町と隣接する。

臼杵川・末広川は、臼杵湾に注ぐその河口には小さな沖積地をつくる。現在の市街地は、この沖積地に位置する。

徳尾・道安遺跡は、市街地の北西部に所在し、共に末広川の支流である熊崎川に仕切られ標高40～50mの丘陵上に立地する。

これらの周辺の台地上には、弥生式土器の散布地として周知されている三重野遺跡・井村遺跡が

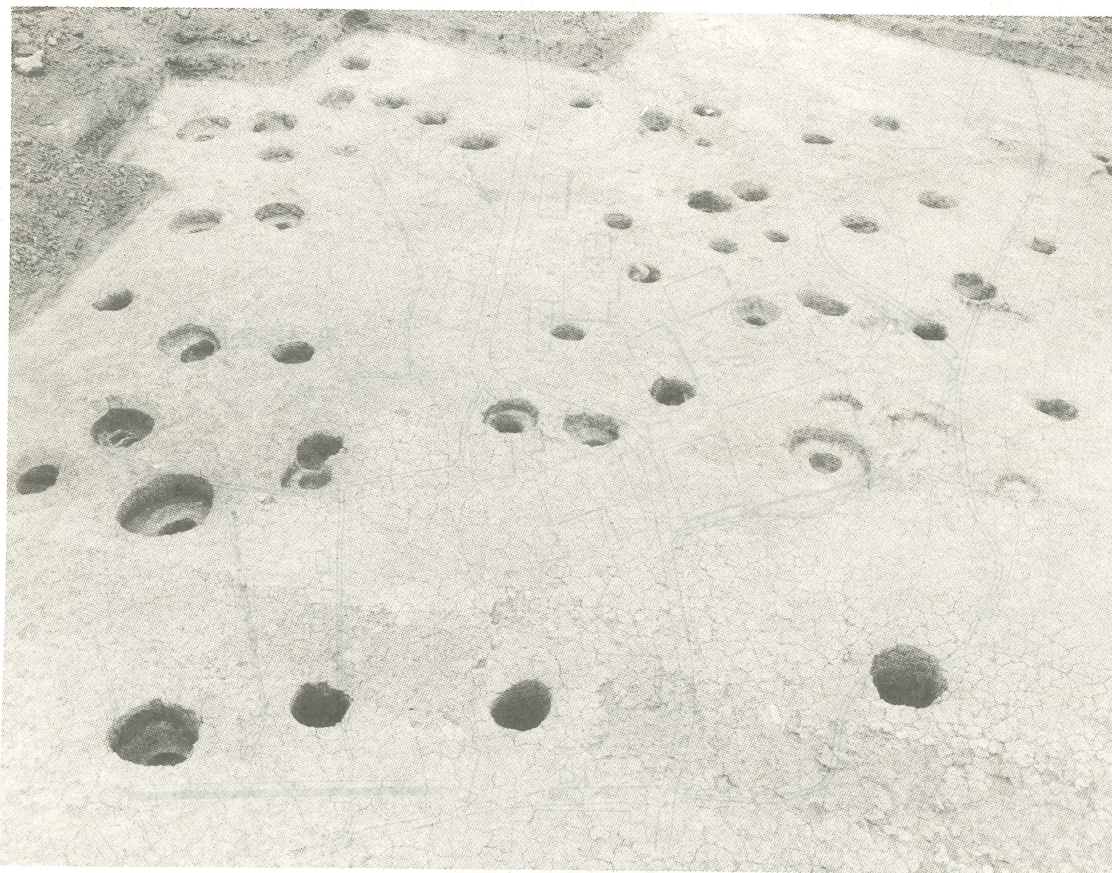
あり、また脊後の山地部には銅矛を出土した坊主山遺跡がある。またこの末広川の流域では、県南地方では最も古墳の集中する地域として知られており、大型の前方後円墳である臼塚古墳^{注(1)}：下山古墳^{注(2)}をはじめ、神下山古墳^{注(4)}：高倉古墳・丸山古墳等がある。

徳尾遺跡は、熊崎川の中流部の西側の南東に延びる標高50m舌状丘陵上にあり、周辺の水田部との間に20mの比高差をもつ。道安遺跡は、徳尾遺跡の南西1.5kmに位置し、東に張り出すやや巾広の舌状丘陵にあり、周辺の水田との比高差は約20mである。この両者のほぼ中間地点には、同様に舌状丘陵を利用した中世栗山城跡^{注(3)}が立地している。

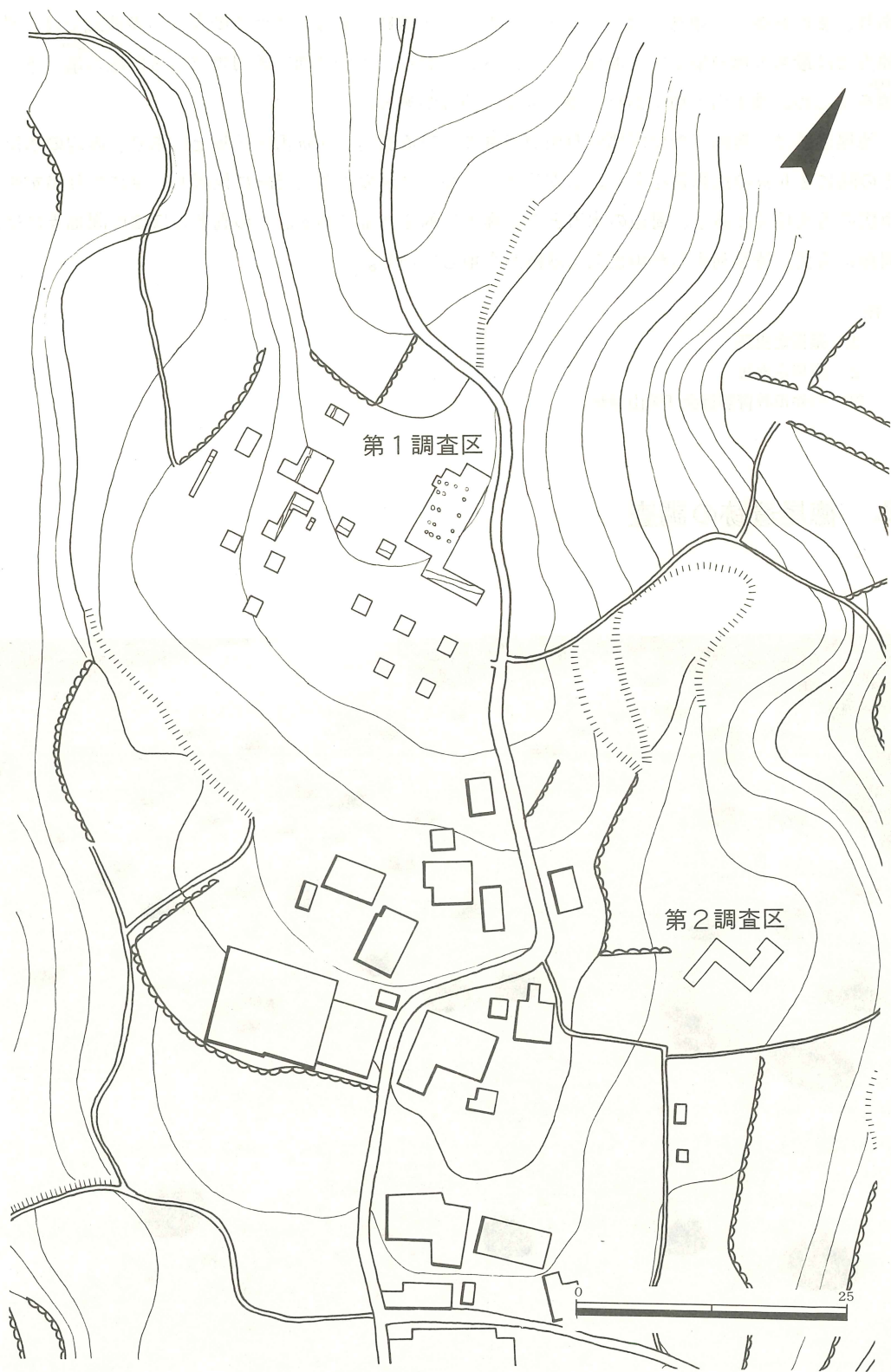
注

- (1) 県指定史跡
- (2) 国指定史跡
- (3) 臼杵市教育委員会「栗山城跡」

2. 徳尾遺跡の調査



徳尾遺跡第1調査区



第2図 徳尾遺跡調査区位置図

1) 遺 構

道路建設予定地のほぼ中央部分に、当初9 m間隔の小グリット(3×3 m)を東西方向に設定し、遺構検出の状況により、随時調査を拡張していった。当遺跡は、畑造成の際、かなり削平を受けた様子で、概して表土は浅く。約10~30cmで遺構検出面(地山)に達する。以下、調査区ごとに発見遺構等について述べることとする。

a) 第一調査区

第1調査区においては、建造物2・排水溝(暗渠)・集石遺構及び、当遺蹟の存在する丘陵を横断するような形でのびる溝(1号溝)等が検出されている。

(イ) 1号建設物

4間×2間の掘っ建ての建造物である。一号溝の一辺に直角に交わる線を引き、建造物の長辺のふりを算出したところ、西へ21°5'であることがわかった。また南西側に半間幅の縁側のような遺構を伴うものと思われる。建造物跡の柱穴内からは、遺物の検出が認められず、年代比定はできない。

(ロ) 2号建造物

1号建造物の北東側にある2間×1間の掘っ建ての建造物である。1号建造物と附属するものと思われる。

(ハ) 排水溝(暗渠)

この排水溝は、1号建造物の長辺とほぼ平行してつくられている。排水溝としては非常に作りがよく、切石を蓋として鎧重ねにしてある。1号溝を横切り下へ流れている。排水溝底部には、水たことを示す砂利が若干残っているが、遺物の検出は認められない。また、この排水溝の上と思限を確認するため調査区を拡張したが、道路建設予定地の端(北側)に、水を溜ることを目的とされる施設を検出した。この、遺構の中からも遺物の検出は認められなかった。

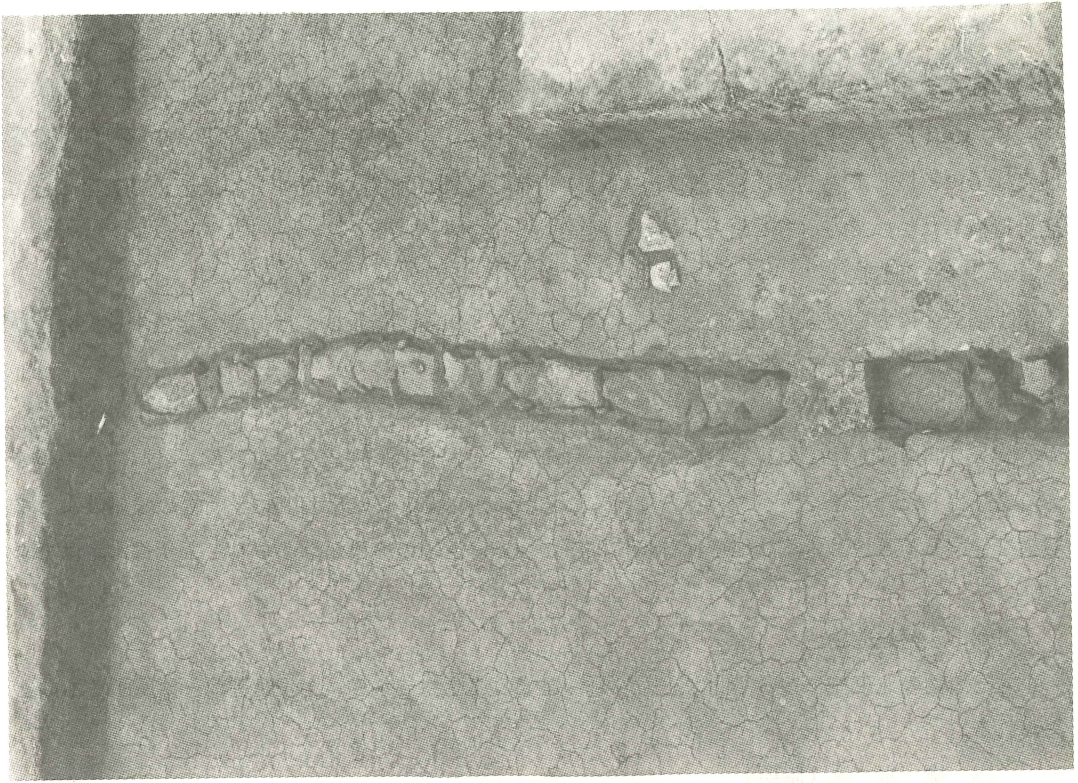
この排水溝を境として、遺構は、東側に集中し、西側からは検出されなかった。また、この排水溝がつくられている土層面は地形が若干の鞍部になっていることから、人意的に造成したものと思われる。

(ニ) 1号溝

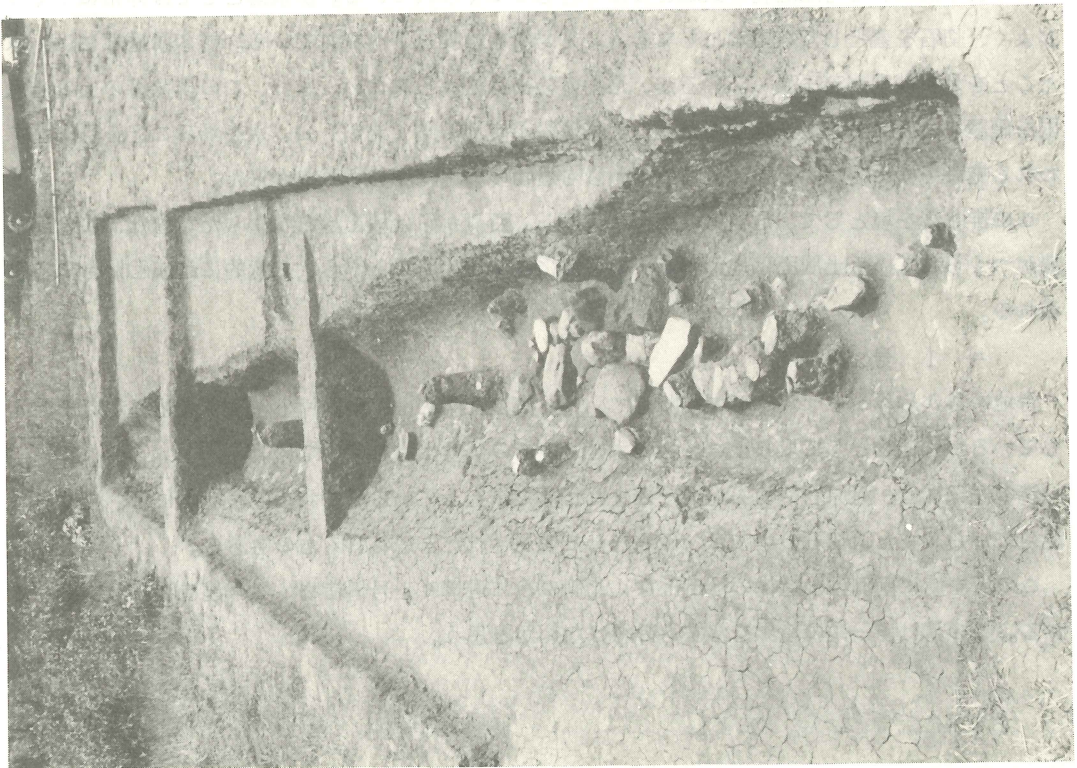
台地を谷から谷へとつなぐ形で横断している。溝のⅢ層には、土器片小粒子や炭粒子が若干混入しているが、遺物として取り上げる程の大きさのものは検出されていない。

溝の底部には、河原石や切石が投げ込まれた形で出土している。これらの石の中には、焼け石も混っている。また、切石の中には、砥石として使用されたと思われるものもある。

この溝を境に南側は、遺構の検出はなく北側のみに遺構(1号建造物・2号建造物)が検出している。この溝は、一つの境界をなすものではないかと思う。



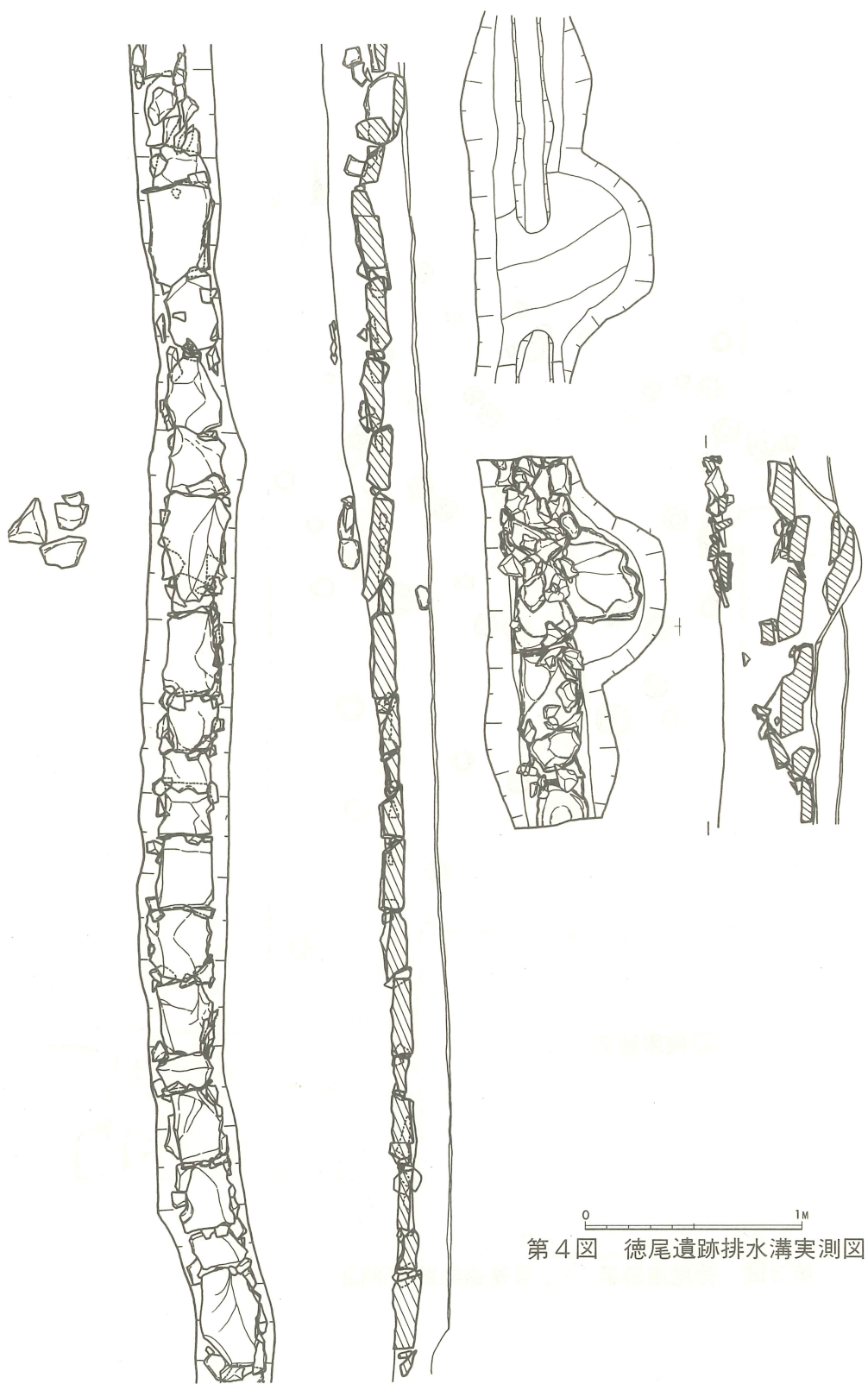
德尾遺跡 1号溝



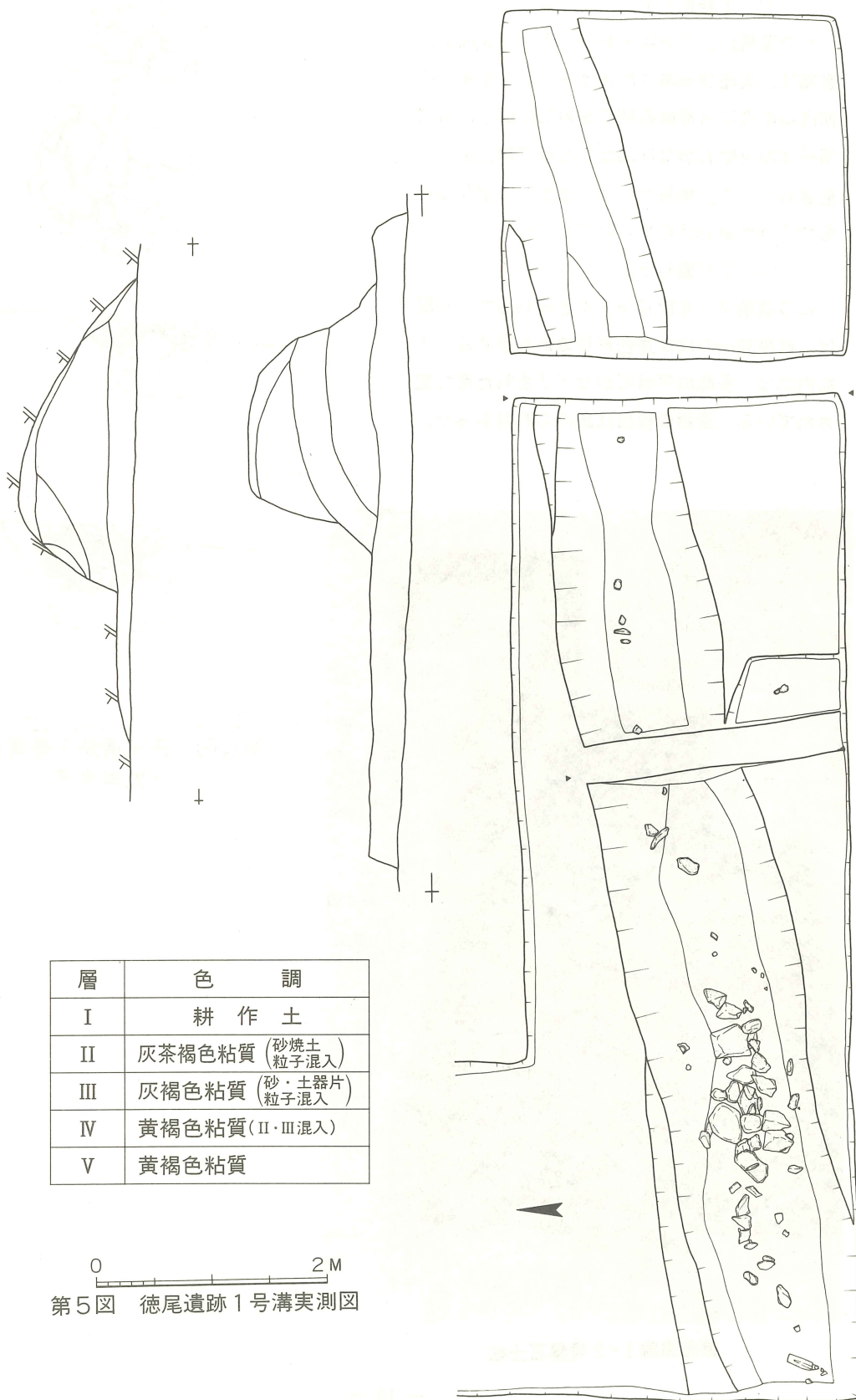
德尾遺跡 排水溝



第3図 徳尾遺跡第1・2号建造物跡実測図



第4図 徳尾遺跡排水溝実測図



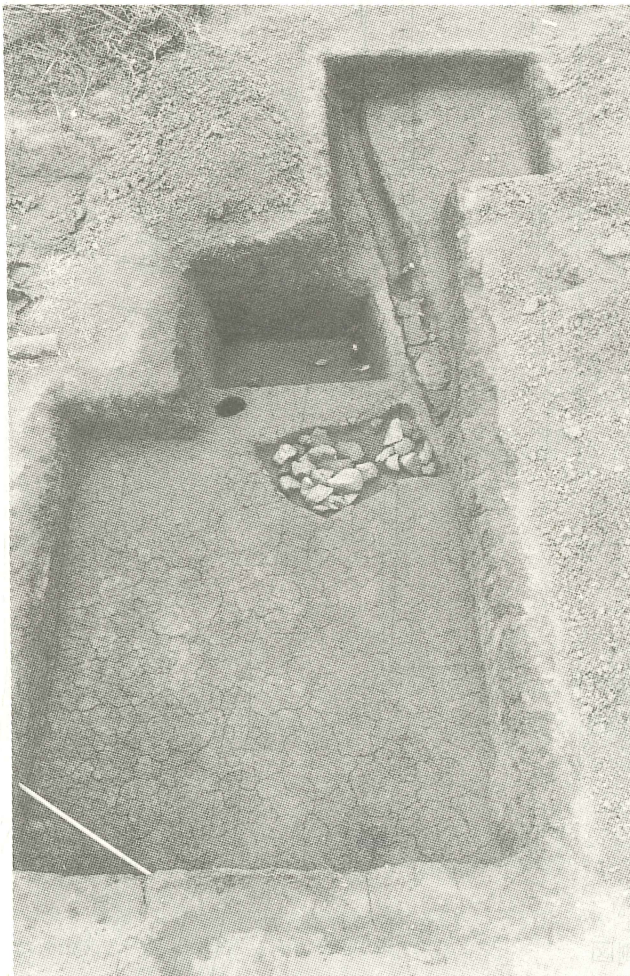
第5図 徳尾遺跡1号溝突測図

(ホ) 1号集石土拵

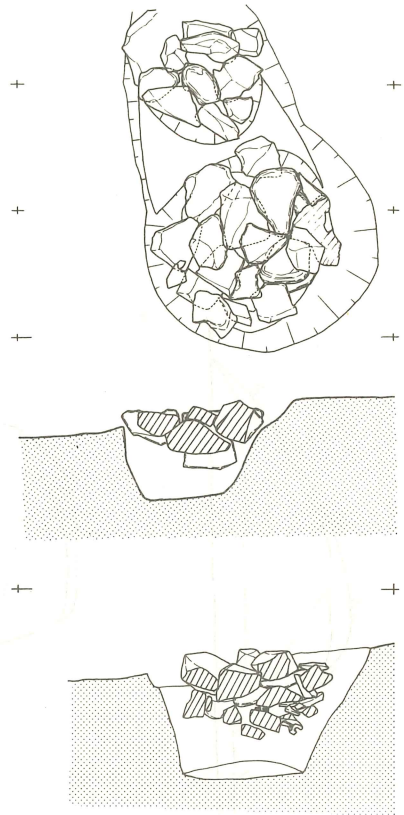
この遺構は、直径90~95cm、深さ約50cmで、底部は、直径48cmあり形状は逆台形を呈す。土拵内の中央に常滑焼系統の甕の口縁部とともに楕円状の河原石がなげ込まれた姿で無差別的に配されている。集石内には、意識して空間などをつくった痕跡は認められなかった。

(ヘ) 2号集石土拵

この遺構は、直径70cm、深さ約36cmで、底部は、直径32cmのほぼ逆台形様の形を呈する。土拵内には、多種の河原石がなげ込まれた形で配されている。遺物の検出は認められなかった。



徳尾遺跡1・2号集石土拵



第6図 徳尾遺跡1号集石土拵実測図

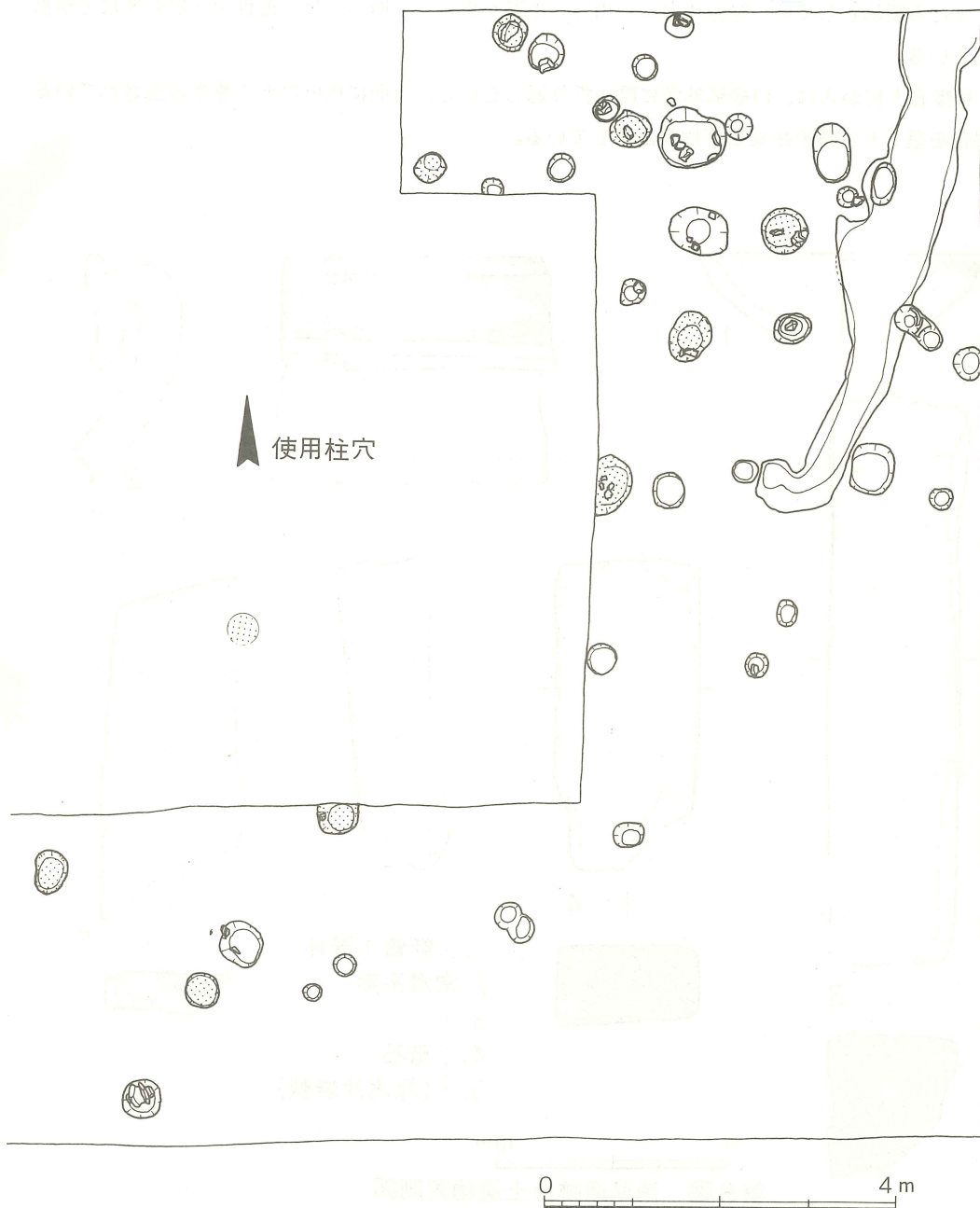
p) 第2調査区(第 図)

第2調査区においては、建造物1のほか、形を呈しない多数の柱穴群が検出されている。

(i) 1号建造物

5間×2間の掘っ建ての建造物である。柱間寸法は、梁行は北妻で東から170cm+210cmである。桁行は西側柱列で北から700cm+190cm+250cm+260cmとなり、柱間寸法にかなりのばらつきが認められる。

しかし、すべての柱穴群を検出していないので疑問な点もある。



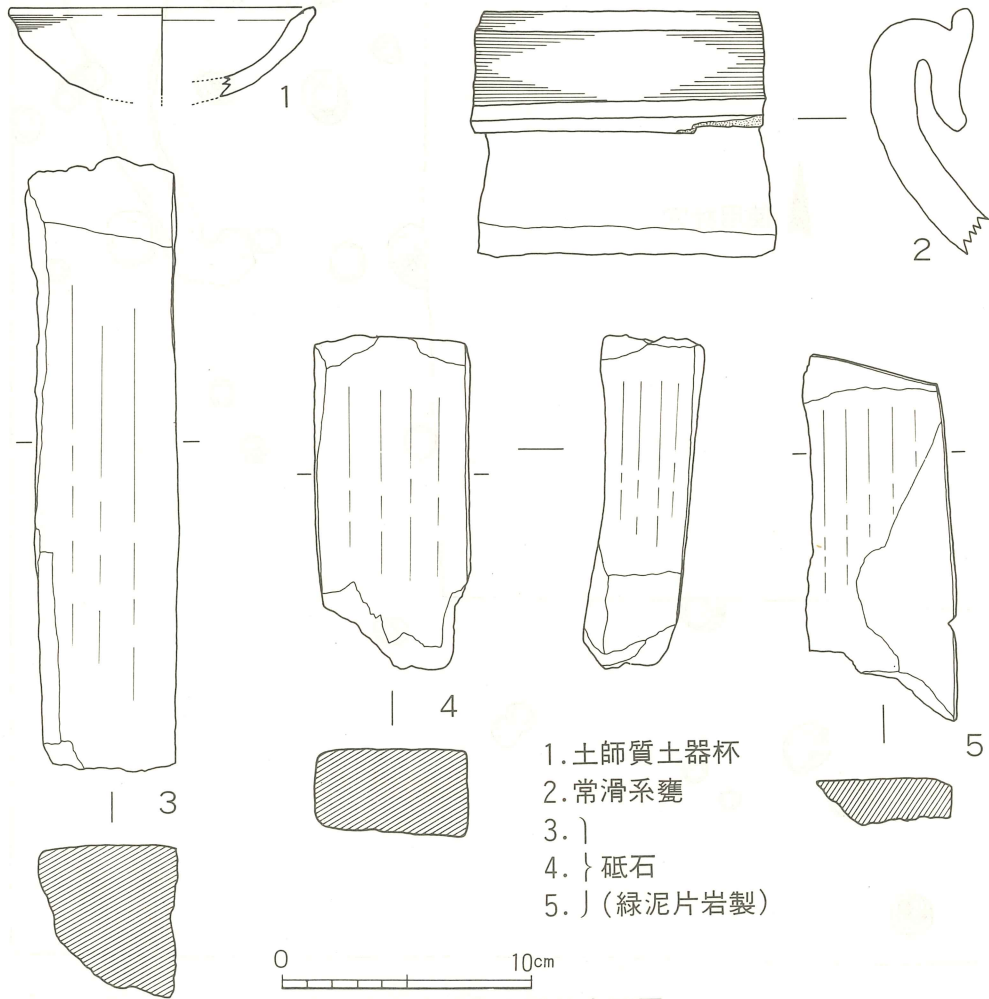
第7図 徳尾遺跡第2調査区1号建造物実測図

2) 遺物

本遺跡から出土した遺物は、種類も限られ、出土量も極めて少ない。したがって、これら出土遺物によって、当遺跡の時代性や生活の様子、遺構の性格等について論述することは困難と思えるので、出土遺物の中でも遺構に伴い、かつ時代的特色を備えている主なものについて記述したい。

1号溝から出土した土師質土器には、口縁部の外側に横位のナデ整形を行い、外体部中位から下部にかけて指ナデあるいは指圧により整形を施した丸底風の杯、瓦質土器には、火鉢片などがある。また石製品としては、緑泥片岩を利用した砥石がある。上層からは、近世陶磁器の皿などが出土している。

1号集石土拵からは、口縁部外面に厚い折り返しを有し、内面に横位のナデ整形の施されている茶褐色を呈した常滑焼系統の甕片が出土している。



- 1. 土師質土器杯
- 2. 常滑系甕
- 3. 砥石
- 4. 砥石
- 5. 緑泥片岩製

第8図 徳尾遺跡出土遺物実測図

3) ま と め

今回の成果は、今までに述べたように建造物3軒・切石による排水溝(暗渠)1条・溝1条・集石土拵2基の遺構が検出されている。また、遺物は、溝の内部から砥石として使用された痕蹟のある切石ほか、数点の土師質土器、また、集石土拵内から常滑焼系統の甕の口縁部が出土している。

以下、これらの遺構・遺物についても若干の考察を加えながら遺跡の性格を推定したいと思う。

当遺蹟で検出された遺物・遺構の中で、時代判明の手懸りとなるものは1号集石土拵内から出土した常滑焼系統の甕の口縁部のみである。河原石で囲まれて出土している状態が遺構よりも新しい時代のものと考えられる。

1号溝については、溝内より土師質土器が出土している。また、建造物については、時代の手懸りとなるものはないが、遺跡一帯には、磁器類等中世から近世にかけての遺物が散布していること、遺跡に「ヤシキ」という通称が残っていることなどから考えて中世末から近世初のものと思う。さらに、溝と建造物の関係を考察すると、遺構はすべて1号溝を境にして南側は検出されなかった事実から考えて、集石土拵がつくられたときになげ込れたものとする。2号集石土拵は、遺物は検出されなかったが、同じ堀込みの中から検出されていることから、1号集石土拵と同時代のものとする。したがって集石土拵は、同時代のものと思われる。

排水溝(暗渠)は、2号集石土拵及び1号溝を切った形で出土しているので、これらのことから考えて、1号溝は、建造物との境界あるいは、外敵からの侵入を防ぎよするため空堀的遺構でありその内部に建物が存するものと思われる。

中世末から近世初において、徳尾遺跡の在する臼杵も他と同様混乱期にあった。天正14年(1586)には、薩摩の島津氏が、大友宗麟の守る丹生島城(臼杵城)を攻めている。慶長5年(1600)には、大友氏の滅亡後、臼杵を領した太田一吉が、関ヶ原の戦いの関係で、豊後岡城主中川氏の攻撃を受けている。

したがって、この時代は、防ぎよ上の溝が必要であったと考えられる。しかし、一般農民の家では必要のないことなので、地頭層あるいは名主層の屋敷跡と考えられるのではないかと思うが、現在、資(史)料が少ないので断定しかねる。後日の研究に期待したい。

3. 道安遺跡の調査

道路建設予定地のほぼ中央に。当初9m間隔の小グリッド(3×3m)を、東西方向に設定し、遺構の検出状況により拡張区を設けていった。遺構検出面は、ミカン畑造成の際に削平を受けた様子で、耕作土を約30cm剥ぐのみで遺構検出面(地ヤマ)に達する。今回検出した遺構は、掘っ建て柱建物跡1棟・溝1条及び形にならない柱穴群などである。以下、主要な遺構について調査区ごとに記述してゆく。

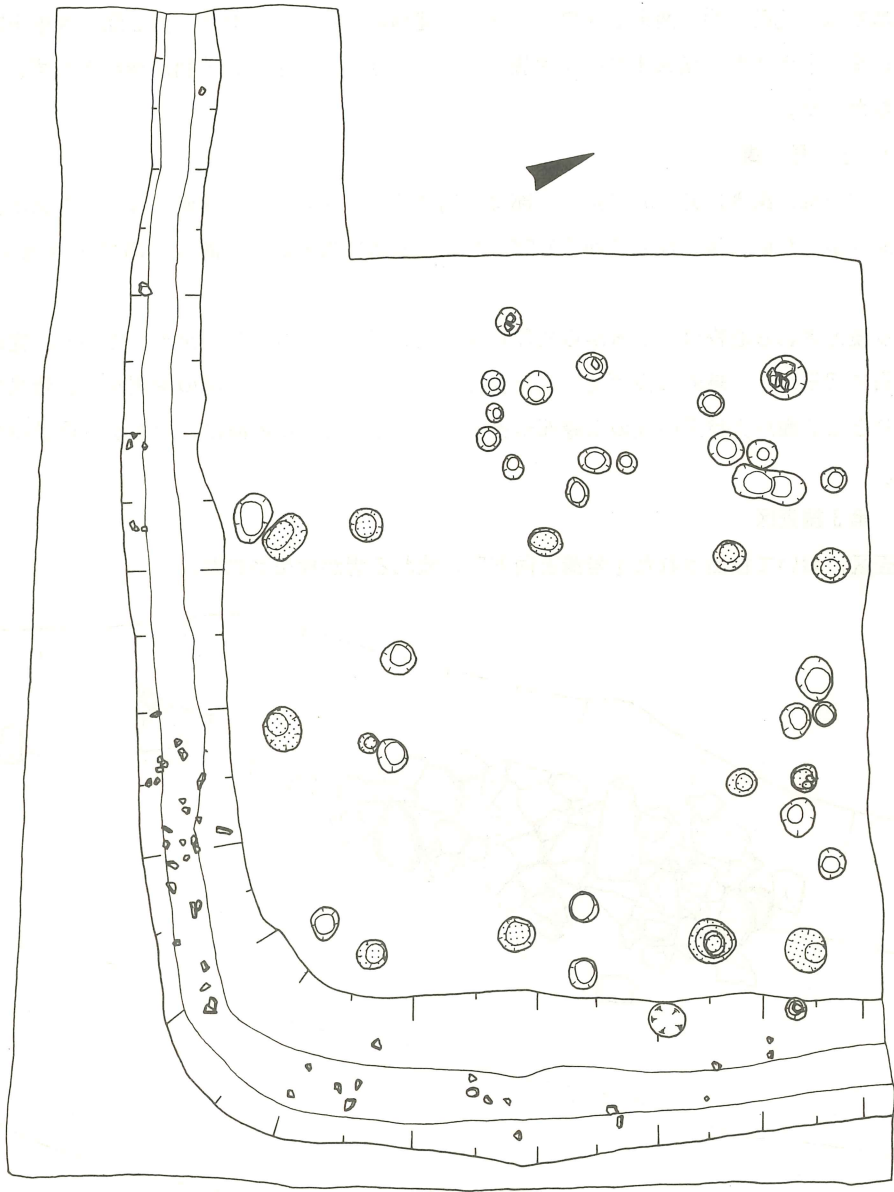
1) 遺 構

a) 第1調査区

ミカン畑造成の際削平されたとし、遺構の検出は認められなかった。



道安遺跡第2調査区



0 2 4 m

第9図 道安遺跡第2調査区実測図

b) 第2調査区

この調査区から検出遺構には、1号建造物・1号溝・1号土拵などがある。

1) 1号建造物

この建造物は、北西2間、南東2間の掘っ建ての建物跡である。北側に北西2間、南東半間の縁側遺構、南側に北西1間、南東半間の付属施設をもつ。柱穴内からは、遺物が検出されず、年代比定はできなかった。

ロ) 1号溝

上幅1.8~0.6m、深さ1.05~0.55mで底部は北側でゆるく立ち上り、南側では、やや急に立ち上る。東は深さがしだいに浅くなってゆくU字形を呈する溝である。この溝は、南でL字形に曲がる。

溝内より検出される遺物は、上層から磁器片及び土師質土器・瓦器片が出土している。底部からは、河原石や切石が、意識的に投げ込まれた姿で出土している。また、溝の南側から、時代の決め手の手懸りとなる瀬戸天目系の碗の口縁部が出土しているので、この溝は、中世から近世の遺構と思われる。

c) 第3調査区

第2調査区において検出された1号溝と同方向に流れる溝が検出された。



第10図 道安遺跡第2調査区1号溝実測図

2) 遺物

本遺跡の遺構から出土した遺物には、土師土器・中世陶器・石製品・弥生式土器などがある。

1号溝からは、内面に7本1組の櫛歯状工具によるカキ目が等間隔に施されている備前系の雷鉢片、やや黒味をおびた鉄紬のかかった瀬戸系茶碗片や楕円形の礫を用いた凹石が出土している。凹石は、片面打痕による浅い漏斗状を呈するくぼみをもつ。そのほか、砥石が出土している。砥石には2種類あり、四面を使用しているものと、一面のみ使用痕の認められる緑泥片岩製のものとがある。

3) まとめ

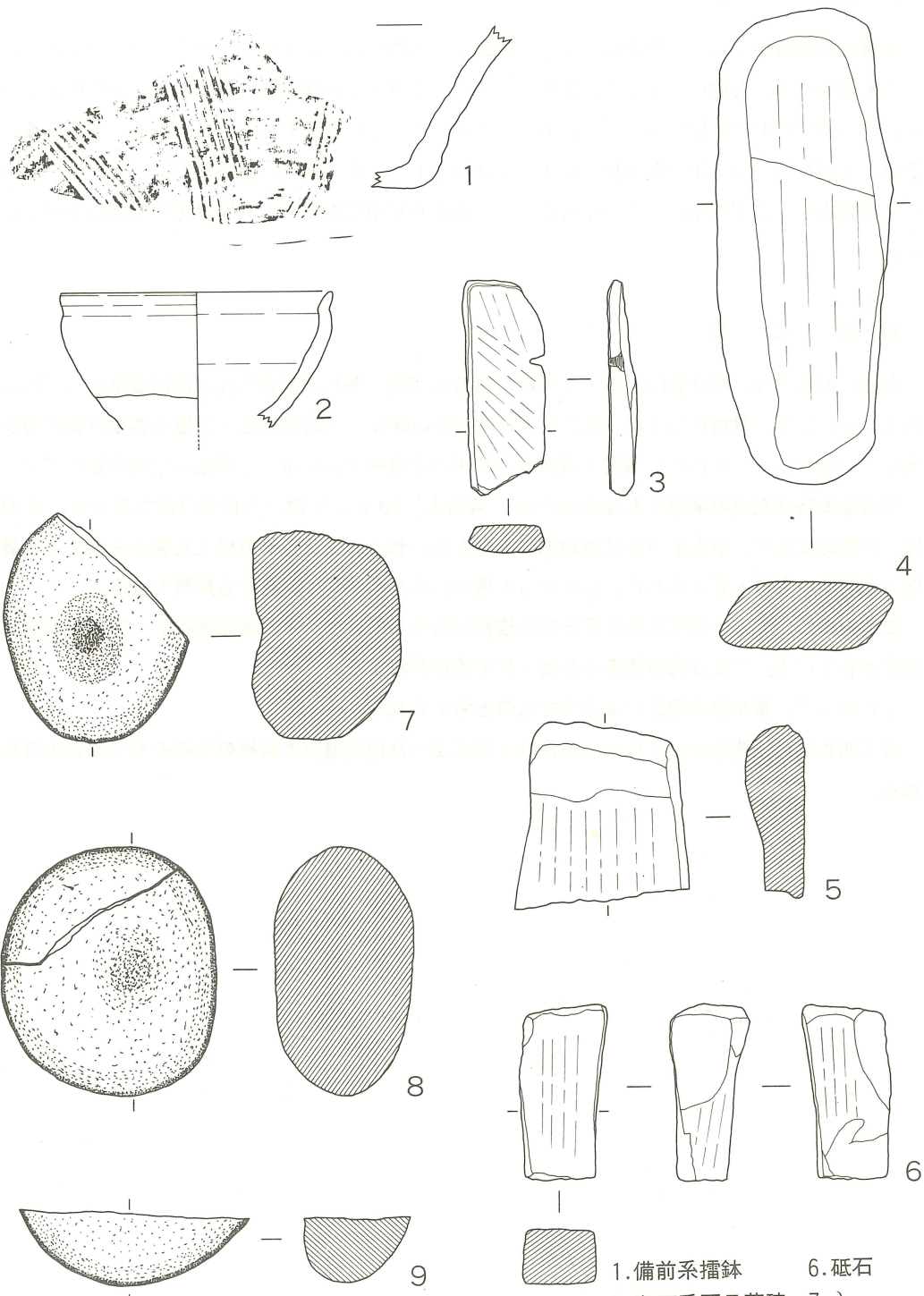
今回の調査では、建造物跡1軒・L字状に曲るU字溝1条及び多数の柱穴群が遺構として検出されている。また、遺物としては、瀬戸系天目の碗の口縁部・土師質土器・瓦質土器及び砥石等が出土している。以下、これらの遺構・遺物等に若干の考擦を含めながら、遺跡の性格を述べてゆく。

当遺跡の時代判明の手懸りとなるものは、溝内より出土した瀬戸系天目の碗であろう。この碗は、形態的に見て、中世末から近世初頭のものと思われる。また、その出土状態から考えて、溝の埋った時期のものと考えられる。したがって溝の作られた時代は、自から解明できる。

建造物については、時代の決め手となる遺物は出土していないが、建造物はすべて溝の北側から検出されている。つまり建造物をとりまく形で溝が存在する。

したがって、溝が建造物と一体となすものと考えられる。

溝で囲まれた建造物ということであるので前に述べた徳尾遺跡と同格の性格をもつ遺跡と考えられる。



0 10cm

第10図 道安遺跡出土遺物実測図

- 1. 備前系擂鉢
- 2. 瀬戸系天目茶碗
- 3. 砥石
- 4. } 砥石
- 5. } (緑泥戒岩製) 片
- 6. 砥石
- 7. }
- 8. } 凹石
- 9. }

臼杵バイパス発掘調査報告書

徳尾遺跡・道安遺跡

1982・3

発行 大分県教育委員会

印刷 陶赤岩印刷所
